



風 狂

第 6 2 号

風 狂 の 会

【詩】

穴ぼこ

なべくらますみ

花粉

出雲筑三

カサブランカの花よ

富永たか子

ジュン君

高 裕香

喧騒と表現

高村昌憲

血と孤独の轍・弐

さとうのりお

犬と巨漢と崩壊するアパート

原詩夏至

——夢の記憶（4）——

西行庵

長尾雅樹

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十六）

三浦逸雄

【エッセイ】

敗戦直後の日々

神宮清志

昭和は遠くなりにはけり？（6）

高島りみこ

【童 話】

パンケとペンケ

宿谷志郎

【翻 訳】

アラン『芸術論集』（二）

高村昌憲 訳

執筆者のプロフィール（五十音順）

道端の植え込み

柘植だの

躑躅だのが

地面の渴きに足元を埃っぽくして立つ

その乾いた土の平面に

ぼこぼこ と開けられた穴が

掘ったのは

数年の眠りから覚め 世に出るための蟬

ゴソゴソ とか

ゴリゴリ とか

音に気付いたことはないが

地中から天井に向けて

一思いに突き上げたような

きっちりと丸い穴

円周はどれも同じような色と形

カサカサ と

周囲に散らばった

茶色の抜け殻

切開いた様に背中を割って

出てきた様子

今 鳴いているのは

この穴から出てきたばかりの声なのか

命絶えて腹を見せ転がる姿も累々と

蟻にたかられ

少しずつ動かされているもの

仰向けのまま

まだ羽をバタつかせるものもいて

この地面の奥には

彼等が残した卵（らん）が

ひっそりと

蓄えられているのだろうか

開発Aチームです
スギ新型花粉弾の出撃命令
QRコード受理しました

明日は偏西風が低い
杉の子よ
風を切り 期待を背負ってくれ

来週は木曾Bステーションより
ケヤキカイゼン花粉弾
雨天時は順延して決行する

我ら植物は自ら動くことはできない
人類よりも雄渾で長い生存の歴史
先住者として傍観は許されない

鳥も昆虫たちも
危険ランクの環境天気図を
翼で身にしみている

熱帯雨林化する都市
資本効率化をやめない産業
懐かしき人はどこにもいなくなった

山火事にも強い耐火けやき
ヒト型砂漠にも強い耐水杉
なぐり塩分にも強い防風松

気力の萎えた生物に明日の太陽はない
年に数日だけ雨が降ることで
命の復活が可能な花粉テストを

人間に変わり 完成させるのだ

安堵の部屋で

カサブランカの花がつよく匂う

オランダの土で

変換させた高貴な花

変貌する天使の気色を

音もなく吸い込んで狼狽てる

うすら涼しい今年の雨季

それから それからの猛暑

わたしが元気だったころ

〈梅雨明け十日〉の言い伝へに

梅雨があけるよ！と

カミナリは太鼓を叩いて触れ

雲は急ぎ去り

ぴたりとした

燃える夏空のよろこびがあった

カサブランカの花よ

まだ見ぬ果てが恐ろしい

日ざかり生と死を分ける一瞬が

こともなく過ぎてゆくところが...

今年度から始まった「作文ノート」
五年生の夏休みの課題
「もし、魔法が使えたら！」

二学期最初の日本語授業
日焼けした顔から
目玉が、ぐいぐい動く。

いつもおしゃべりで遊んでいる。
珍しく「やって来ました。」
にこにこ、作文ノートを差し出した。

魔法なんてこの世にありえない。
科学的にもありえない。
でも、「もし、魔法が使えたら！」

一番目は、「環境問題」
地球温暖化、福島汚染問題など
パット、地球の環境を整えたい。

二番目は、「能力」
素晴らしい能力あればいい
パット、何でもできると良い。

三番目は、「悪いことに使わない」
自分の利益になるだけでなく、
世界の人が幸せになるように使う。

子供は、ゲームばかりでない。
『考えること！』
これを与えともしっかりできる。

大声で怒鳴ることは叫び声と同じですから
創造的思考を妨げる単なる肉体の反射です
動揺する肉体は精神と両立できませんから
叫び声は創造的な精神の営みを蹂躪します

沢山の人々が集まる集団は目的が優先され
個人の望みも同一化されて精神を失います
抑制して熟考する個性は不都合と見做され
華やかな催しや行事には大声が活躍します

沢山の人々が同じ方向を見る様にするには
肉体の反射に酷似した喧騒に働きかけます
沢山の人々が個性を忘却する様にするには
個性を装飾する催しや行事に向かわせます

自らを真に表現するには沈黙が必要であり
大声も集まりも催しも行事も相応しくない
静謐な本質に戻って表すことが必要であり
如何なる喧騒にも表現するものは何もない

自らが感じているものは大声を出さないで
精神の裡で情熱に高めて表現することです
表現とは思想であるから喧騒に逃れないで
情熱を輪郭と形式と礼儀で整えることです

「チッ、俺とした事が、
老いぼれてしまったもんだ」
子連れの母熊を撃つのはマタギにとっての最大のタブーである。

荷車で熊を運ぶ達造の足元から小熊はなかなか離れようとしなかった。
小屋に着いて一服したあと、すばやく見事な手捌きで熊を解体する時も、この老いたマタギの脇に座って、その様子を見ている。
「仇を討つのは、お前がもう少し大きくなってからな」少し笑いながら、小熊の頭を撫でた。

さて、どうしたもんか。このまま森に帰したところで、すぐに死んでしまうだろう。
達造は天涯孤独である。
山の麓にある小さな神社に捨てられていたところをアイヌのマタギの親方に拾われたのだ。

腕のいい親方に厳しくマタギになる^{すべ}術を叩き込まれた達造。
親方もなぜだか家族は一人もいなかった。
達造が一人前になりかけた頃、親方は誤って仲間のマタギを撃ち殺してしまい、その銃で自死した。

孤独は苦ではなかったが、自分に^{なつ}懐いてしまった小熊に、妙な責任感が芽生えたのも確かであった。
山羊の乳があれば何とかなつたし、果実もイモもよく食べた。
寒い夜は一つ布団で寝もした。

一年がたち
体長も四尺以上にはなつたし
わしももう長くない。
早くこいつを森に帰さねば。

朝に腹一杯喰わせて山に入り
熊が沢で遊んでいるうちに遠回りして小屋に帰ったのだが
最初は失敗だった。
小屋でなぜだか泣きながら酒を飲んでいると、
戸をトントン打つ音がする。開けると熊がとび込んできた。思わず熊を抱きしめている自分がそこにいた。

これではだめだ。
三日後、朝食は食べさせず、山に入った。
少し大きな沢を渡ってから、好物の果実やトウモロコシを山程ザルに広げた。腹を空かして、むしゃぶり喰っている熊に気づかれないよう、そっとその場を離れた。沢が匂いを消してくれるはずだ。

今度はうまくいったようだった。

これでアイツもなんとか山で生きていけるんだろう。

そんな事を自分に言いきかせながらウトウトしていた嵐の晩、入口の戸に何か大きな物がぶつかった音がした。まさか！いやもう一ヶ月近くもたっているぞとつぶやきながら突掛い棒をはずし戸を開けると、熊が転がり込んできた。

痩せ細っていた、あまりにも。

あちこちに深い傷もある。

やっと熊を布団まで行き上げると

横になって頭を撫でてみる。

小さく眼を開けて「クゥー」と鳴いたきり

身動きしなくなった。

野生の眼を抜かれないきものは山では生きてはいけないのだ。

「すまん、許してくれ！お前の一生を台無しにしたのはこの俺だ！」低く唸った達造は、枕もとにあった、この子の母親をさばいた小刀を持ち出すと、自分の首に当て、一気に引いた。

温かい液体が孤独ではない二つの生きもののからだに降り注いだ。

（これは、かみさんが俺に語った夢——）

よく笑う
燃える緑の眼をした
欧米人風の巨漢が
自分が大家をしている
きたない
アパートの入り口に
立っている。
両腕には
服を着せられた
黒い
大型犬のようなものを
抱えている。

そいつは
犬のようではあるけれども
顔は
どことなく
猿にも似ており
動きが妙にギクシャクしていて
（実は、ロボットか？）
とも疑われる。

或いは
頭を叩かれると齒をむく
シンバル叩きの
チンパンジーなのだろうか？

巨漢は
そいつを抱いたまま
鍵をあけ
アパートの奥へと
笑って姿を消す。

巨漢は
そいつが
大のお気に入りだ。

だから
人間でもないそいつに
まるまる
一室をあてがっているのだ。

（隣家の男が
その一部始終を
苦々しく
横目で追っている。
男も
実はそいつが欲しいのだ。
だから
巨漢が憎くてならないのだ。）

突然
アパートの
その犬みたいなやつの一室が
そこだけ
道路側へとせり出して来る。
（まるで、崩れるコンテナのように……）
どうやら
巨漢が
裏手に回って
押しているらしい。
（だが、一体何のために……？）

恐らく
力を入れ過ぎたのだろう
壁が壊れて
こちらに雪崩れかかり
かみさんは
瓦礫の下敷きになる。
それでも
必死で首だけ外に出すと
地上は輝くばかりの快晴で
巨漢が
光の下
ぼーっと立っている。

「助けて！ 助けて！」
かみさんは叫ぶ。
（こうなったのは、あんたのせいでしょ？）

心の中で

そう付け加えて。

「すみませんね……」

巨漢は笑顔で答える。

だが、少しも手は貸さない。

（全く！ 何てやつだ！）

かみさんは

やむなく

自力で這い出す。

そして

やっとの思いで

巨漢の前に立ち

自分も言葉を返す。

「すみませんね……」

（それにしても

どうして、私が、あんたに謝るのさ？）

そう

忌々しく

心に呟いて……。

吉野の山深く
人里離れた谷間の奥に
風の音を友とただろうか
清々しい山間の空気を吸って
漂泊の生命が庵に住む
山を棲家とした石を枕とするならば
八百年を越える歴史の彼方から
懐かしい風貌の遊行僧が居る
苔清水の水を喉^{のど}に浸して
千載一過の御仏の正覚を願って
旅僧の栖は冷え冷えとして西日を受ける
四季のめぐりの吉野の山々の響きが
杉の木間から流れ落ちる入り日
谷間の細道を経文唱えながら
修業の足跡を深山に残して
桜吹雪の季節をいつも胸に秘めて
吉野の夢を探りながら生死を想う
西行の跡を慕^{した}う芭蕉がいた
日本の伝統の経路を走り抜く
侘^{わび}と寂^{さび}の境地を谷間に木霊させて
桜の花の歌人が一人虚空に眠る
小さな庵の跡を訪ねて
人間の魂の無常を観念しながら
山間の漂よう漂泊の心情を問う
芭蕉は夢は枯野をかけめぐると作句しながら
西行の夢も俗世を離れることだったろうか
庵室の中での生活は
読経と歌作^{さんまい} 三昧の毎日だったのだろうか
木を草を鳥を花を我が仲間とし
水を生命の糧として
山河峡谷の寂滅の世界が胸中を慰めよう
凡僧の業を悔いながら
御仏の境涯を色心に現し給うとの
吉野の山深く庵の影が時を隠すだろう



三浦逸雄「月のもとに」 8号（アクリル・紙）2019

学校が再開されて

早くも秋の風が肌に心地よい九月はじめに学校へ登校した。しかしそれまで陸軍が使用していた校舎はまだ荒れ放題、学校の態をなしていなかった。ある教室には木刀が山と積んであり、それを見つけた上級生が剣鐔^{けんつば}を取って、ポケットにしまっていた。泥棒のし放題だったのだ。それとその頃のすさんだ空気には、剣鐔を集めることが好まれていた。

それから少し経ったある日、わたしたちは一つの教室に集められて、音楽の授業を受けた。生徒は一学年に三〇人も居ただろうか。どういうわけか机と椅子がまったくなかった。床の上に座って車座になり、先生を見上げていた。女の先生が黒板に歌詞を書いて、ピアノで曲を教えてくれた。みなは大きな声で合唱した。

土手のすかんぼジャワ更紗 昼は蛍がねんねする

僕ら小学尋常科 今朝も通ってまた戻る

この歌を先生の指導でなんとか覚えたわたしたちは、何度も繰り返し歌った。声を揃えて思い切り大きい声を出して歌った。このときの明るい気分を忘れない。いかにも平和になったという実感が充ち満ちた瞬間ではなかったかと思う。というより小学校へ行ってから、音楽の授業を受けたという記憶がなかった。みなで合唱するという楽しさは戦後にこそはじまったのだと思う。その最初の歌がこれだった。

少しずつ学校の授業が始まりつつあるころ、わたしたちの一家はまた引っ越すことになった。兵隊にとられていた若者が復員してくることになり、わたしたち一家が借りていた家を空けなければならなくなったのである。農家の親切にすぎた暮らした牧歌的な日々が過ぎて、戦後の混乱からしだいに回復してゆくなかで、いよいよ極貧を余儀なくされた少年時代を迎えることになる。戦争中はみな命の危険を感じながら、同じ運命共同体の中で暮らしていた。そうした桎梏が取れて、しだいに貧富の差が現れ、屈辱に耐えて生きることになる。

船橋から宮坂二丁目に引っ越したのは敗戦の年の秋、わたしが小学校三年のときである。そこは小田急線「豪徳寺」と「経堂」の中間点のやや豪徳寺寄り、当時の我が家は崖の上であり、その北に畑が広がり小川が流れていた。一台の馬車に荷物を積んで、この家に到着したときの母の暗い顔を覚えている。わたしもまた暗い気持ちになった。ひどいボロ家だったからだ。白いモルタルの外壁はあちこちで剥げ落ち、下見板が剥き出しになっていた。玄関の柱は腐って、ガラスの割れた引き戸を開けるのに苦勞する状態、とても玄関といえるものではなかった。その家は八畳・六畳・三畳の三部屋があり、三世帯七人で住んだ。

経堂小学校には毎日のように疎開先から帰ってくる生徒が現れ、その都度机を入れたり落ち着かなかった。戦後最初に担任として登場したのが、山田義春先生という若い特攻隊がえりの熱血漢である。この先生にわたしは好かれなかった。体が弱くよく休んだのと、すこぶる意気地がなかったのがいけなかった。もっともこれでは誰にも好かれなくて当然だったかもしれない。しかし殊のほかわたしには厳しく、つらく当たるように感じた。

教科書が無くて、とりあえず先輩のお古で間に合わせるようになった。しかしそれを手に入れるのが容易ではなかった。あの手この手を使ってなんとか入手したり、場合によっては書き写したりした。しかし戦争中の教科書は内容に問題があって、上からの指導で直す必要があった。とくに国語などが問題で、紙を貼るように指示されたページがたくさんあった。紙を貼るのが大変で、後には墨で塗りつぶしたりした。

秋も深まるにつれて生徒の数がますます増えてゆき、教室に入りきれないくらいになった。一つの机を三人で

使うようなことにさえなっていた。三学期になって、いよいよ教室にあふれるようになってくると、低学年については午前と午後の二部に分けて、四時限ずつの授業を行った。先生も大変な仕事だったにちがいない。

四年になると二クラスとなり、わたしたち二組には金川朝茂先生という静かで優しい先生が担任になられた。戦争が終わった翌年以後、先生方も少しずつ増えていった。教室も少しゆったりして、しだいに整えられた。クラスメートも大人しい目立たない生徒たちで埋まった感があり、わたしは学校が好きになっていった。

飢えに苦しむ

いっぽうこの三、四年のころがもっとも飢えに苦しんだときである。一日一食が普通で、それさえ満足に食えないことがあった。母は袋貼りの内職で細々と稼いでいた。この作業をわたしもよく手伝った。やがて栄養失調で鳥目になった。夕方遅くなって学校から帰るとき、あたりが真の闇のようになり、ほとんど見えなくなった。うちの近くは道がひどく悪くて、ただでさえ歩くのに困難なところである。ぬかるみを歩いていて、足元が見えないのだ。ここで挫けてはならないと自分に言い聞かせて、真剣にうちへたどり着いた。遠くに見える電灯と、うちの屋根に当たったわずかな光が頼りだった。

またあるとき、足に怪我を負った。膝のあたりから血が流れた。その血の薄いこと、水に赤の絵の具を溶かしたようだった。どくどくと流れるというのが普通だろうに、すーっと何の抵抗もなく痩せ細った脛を伝って流れ落ちた。これを見た大人がもう駄目だとささやきあっているのが聞こえた。子供が死ぬときは、昨日まで普通にしていたのが、あっという間に死んでしまうものだ。そうしたことが周辺にもあった。わたしは死のすぐ近くに居たことは間違いない。

やや太った子供が居て、ときどき一緒に遊んだ。名前が定かではないが、あるいはイシバシ君といったような気がする。寡黙で大人しく目立たない少年だった。彼は力なく歩き、表情が乏しく生気がなかった。一緒にどこかへ行くことがあった。蓋の取れた陸軍の水筒を持っていて、その蓋の代りに親指を差し込んでぶら下げている。唯一の宝物のように大事にしていた。その彼が死んだと聞いた。飢えて死んだのである。太っていると思っていたのは、むくんでいたのだ。あのだるそうな歩き方、光りのない目つきを思い出す。

そんな折り、うちの庭に一匹のかえるが居た。それを捕まえると、腰のところから切って、脚を火にあぶって食べた。白身の肉が太い骨からぼろぼろととれて、くせのないいい味だと思った。そのかえるの脚一本で、わたしの命がつながったのかもしれない。翌朝、かえるのギャツギャツという鳴き声を聞いた。見ると昨夜食べたかえるの上半身が、前脚で一メートルくらい歩いて臓物を引きずっているのだ。わたしに命を与えてくれたかえるの凄絶な姿は、今でもはっきりとよみがえってくる。

あるとき金川先生がうちを訪れ、一合の米を差し出した。これは学校の困った生徒のために届けられたものだけれど、神宮君に食べてもらおうと思って持ってきた、という意味のことを言われた。その優しい目を忘れない。母は何度も深くお辞儀をした。この米は貴重品で、何度にも分けていろいろなものを混ぜて食べた。

配給制度があって、近所の数軒毎に班分けされ、食料品を分け合って受け取った。配給品の中には、家畜の飼料である「ふすま（小麦の皮の屑）」とか、大豆粉といったものがあった。大豆粉というのは、大豆油を絞ったあとの大豆粕を粉にひいたもので、ふすまと並んでもっとも食べにくいものである。とうもろこしの粉が比較的食べやすいほうで、フライパンで焼いて食べた。フライパンにひく油がないので、かぼちゃの葉を敷くとくっつかなかった。外米という代物も食べられたものではなかった。

米軍の放出品であるベーコンの缶詰は、上等品の中の上等品である。同じ放出品の中に、チョコレートがあったけれど、食べているうちに中から虫が出てきた。ベーコンも缶詰の缶が錆びていたし、とつくに期限の切れた不良品が回されたい。これが副食品とかお菓子として食べられるという状況ではなく、それだけで何日分の食糧配給品なのだ。配給はしばしば遅配になり、ときには欠配になることさえあった。

それを補うのは買出しと闇市の品々である。人々は大きなりュックに食料品を詰めてどこから帰ってきた。

うちの母も残り少ない着物を持って農家に何かしら食べ物を分けてもらいに行った。芽の出たサツマイモを貰ってきたこともあった。それで五日くらい食いつないだ。それが無くなるとなると心細かった。

小田急線豪徳寺駅と東急世田谷線（当時は玉川線）山下駅の間が闇市となり、もの凄い活況を呈していた。見ているだけで面白かったので、毎日のように闇市をうろついた。新鮮な魚とかこんにやくあるいは偽の甘味品、あらゆるものがあふれていた。客を呼ぶ売り声が飛び交い、賑やかな光景が毎日繰り広げられた。

父親の居る家庭では、それらによって食卓が豊かになっていったようである。しだいにその差が出てくると、かえって空腹感がいや増すのだった。「赤いリンゴに口びるよせて」という唄が大流行したが、腹が減った身には、妙に心にしみるものがあった。

配給の粉食が次第に食卓に載るようになり、いかに不味いとはいえ栄養にはなる。ひどいものばかり食べているのに、またあるとき怪我をして出血したら、どくどくと濃い血が流れた。そのとき命が助かったのだという実感をもつことができた。本当にひどいものしか食べていないのに、とそのとき不思議な気がした。どんなものからでも滋養は取れるものなのだ、と今でも思う。ちなみに庭に生えてくる雑草で食べられないものはない。毒草でない限り、食料にはなる。ただし不味いばかりでなく、あくが強くて食べにくい。調味料とか、食用油があれば、結構食べられるところだが、塩しかないので調理のしようがなかった。塩といっても薄汚れた岩塩の塊が配給になり、それを水に溶かしたものを使っていた。

極貧の中で

三年のときは一学年にクラスだったが、四年になると二クラスになり、五年になると三クラスに増えた。わたしは三組・島良一先生のクラスになった。島先生は絵の先生で、わたしは絵が得意だったので、それまでほどには劣等感を増幅しないで済んだようだ。「青葉展」という展覧会が毎年行われ、そこで「金賞」を得たことがあった。小学校時代を通じて一番嬉しかったことである。このとき、それを決めるために各教室を委員の先生方が回って歩いた。わたしは美術部だったので同行していた。このとき正善達三という先生が、わたしの絵を暖かみがあると賞賛してくれてすぐに金賞に選んでくれた。この言葉も本当に嬉しかったし、その後ずいぶん励みになったことは確かだ。絵の道具がほとんどなく、クレヨンとクレパスを教室の中で拾って使っていた。そのためクレヨンとクレパスを混ぜて使い、手元にある色だけで絵を描いていた。それでも充分に楽しかった。クラスの中にはすでに高級な水彩とかパステル画を描く者も現れていた。

母はうちでやる手内職をやめて、工場勤めに出るようになった。「同愛会」という袋とか造花を製造する会社で、うちからすぐ近いところにあった。忙しいと晩くなることも多くなってきた。そこでうちの掃除とか夕食の支度などはわたしの仕事になった。

あの当時の一般の小学生には靴下縁がなかった。上流階級のお坊ちゃまお嬢ちゃまが、もっぱら履いていた。わたしたちはひたすらつぎの当たったぼろ足袋を使っていた。しかしそれも途切れがちであり、一冬素足で過ごしたことがある。銭湯に行くことは稀で、年に数回であった。極貧とはそうしたものである。

そのころは今と違って、冬の寒さはより厳しく、朝起きたとき部屋の中で零下二度になった。霜は厚く降りて、それが融ける昼間は道がぬかって歩きにくかった。そんな中で素足で生活することのつらさは想像しがたいと思うが、案外慣れてしまえばそれほどでもないものだ。「人はどのようなことにでも慣れることの出来る存在である」とは、ドストイェフスキーが『死の家の記録』の中で書いている。まったく同感である。

貧そのものは慣れることも耐えることもできる。しかし、問題は「貧ゆえの」というところだ。貧はしばしば人の軽侮の的になりがちである。これは耐えがたいし、慣れるということはなかった。心の傷は癒しようがないものがある。哀れな存在というものはときに苛めの対象になる。哀れなものを見ると人は苛めたくなくなるという、いけない習性がある。自分がその対象になってしまうことのつらさ、これは耐え難い。そればかりか深い心の傷がいつまでも残る。

素足で歩いていると、その姿に哀れさを感じて、ときに同情の言葉がかけられる。「まあ、可哀相に」といった近所の奥様の言葉にも、したたかに傷つくのだった。そうした言葉には一つの優越感が隠されており、そのことを敏感に感じると同時に、劣等感をいやがうえにも刺激されることになってしまう。

ノミ、シラミにはずいぶん悩まされた。ノミとシラミに食われた跡が皮膚一面に残り、人前で裸になれなかった。シラミにたかれると、たちまち下着の縫い目に卵を生みつけ、それが孵るといっせいに血を吸い出す。その痒さはたまらない。シラミ退治にはいくら時間があっても足りなかった。回虫にもこの当時はみなやられ、何十匹も出ることがあった。DDTもお馴染みだった。それを体中に吹きかけられ、真っ白になったこともある。

遠足、修学旅行、卒業写真といったものも縁が無かった。いつもわたしだけが欠席した。そのため記念写真というものがまったく残っていない。正月に小遣いを貰うことはなかった。正月のように子供達の喜ぶときが、もっともつらいときだった。

稼ぐ必要に迫られて、仕事をした。生まれてはじめてやった仕事は行商である。石鹼を売って歩いた。三〇円で仕入れて、四〇円で売った。これがいっこうに売れないのである。よそのうちに行って「石鹼を買ってください」というと、必ず断られた。いつまで歩いてもいっこうに買ってくれるうちはない。とうとうわたしは知り合いのおばさんのうちに行って、買ってもらった。

わたしが行商をしていることは、たちまち学校のクラスの一部に知れてしまった。それを揶揄軽蔑する生徒が現れたとき、断固阻止してくれたのが山下武雄君である。山下君はわたしの仲良しの一人ではあったが、クラスの中で強いほうでもなく、勉強ができるほうでもなく、リーダーシップの取れる位置には程遠い存在だった。にもかかわらず彼の真剣な説得で、わたしへの蔑みはぴたりと止んだ。あるとき乱暴な少年が汚いたびを履いた足を、転がったわたしの鼻先に突きつけてきた。そのとき塩井妙子さんという女の子が猛烈に非難し、言葉激しく詰め寄ってついにやめさせた。妙さんは情熱的な大きい眸をもった子で、体も大きくドッジボールの選手に選ばれていた。

「あの頃は苛めも無くてよかったわね」その後同窓会などでこんな声を聞く。それは今のあまりに常軌を逸した苛めと比べての発言であることは言うまでもない。しかし苛めというものは、それを受けた者でなければ分からない。わたしは書いたように、クラスの中の味噌っかす的存在だったので、常に苛めの対象だったという強烈な思いが残っている。四年の担任だった金川先生も含め、だいたいの級友と先生はわたしが苛められていることは知っていた。子供の社会では苛めはある程度不可避のものであろう。自然なことだとさえ思う。では何故それが事件にまで至らなかったのか。大きな問題にならなかったのか。それは「やめろ」と声をかける生徒が居たからだと思う。山下武雄君とか塩井妙子さんのように知らぬふりをせずに堂々と立ち向かっていく生徒が居たということの意味は大きいはずだ。当時はそのような指導もなされていた。

現代の何が問題かといえば、知らぬふりをするクラスの大多数にあると思う。苛める者も苛められる者もごく少数でしかない。関わることを避け、見て見ぬふりをする大部分のクラスメートたち、これが事件にまで野放しにする温床を作っているとみる。（了）

大学を無事に卒業したものの、就職活動などまったくしていなかった私は、三月の卒業と同時に職探しを始めたのだった。思い返すと空恐ろしいほどのマイペースだが、「まあ、なんとかなるさ」の時代でもあった。絵描きになろうと思っていたから、職探しにさしたる熱意もなく、求職雑誌を片手にいくつかの会社に願書を出し面接に向かった。同級生たちは美術教師になった人が多かったようだ。私自身は教員に向いているタイプではないと考えていたから、教員免許は取得しなかった。中には電通に就職が決まったという同級生もいたが、デザインには興味がなかったので、「なんすか？ 電通って？」なありさまだった。

とはいえ美術系の就職先は限られている。なんだかんだいいながら結局のところ、市ヶ谷にあった小さなデザイン会社に就職が決まった。近年、電通のブラック企業振りが取り沙汰されているが、広告・デザイン業界は基本的にブラックである。とにかく拘束時間が異常に長い。朝は十時に出社だが、退社は終電で帰ることができれば御の字。終電を逃して相棒にオートバイで迎えに来てもらったり、市ヶ谷からタクシーに乗り自宅のある高円寺に向かうも手持ちのお金が底をつき、途中下車し家まで歩いて帰ったこともあった。当然、会社からタクシー代は支給されない。そんな日々が続くから、社員も十時には出社できず遅刻、残業が益々増えるという悪循環に陥っていった。同僚の中には寝袋を会社に持ち込み、泊まり込むという強者もいた。

その会社はデザイン会社といっても元からなにかをデザインをするというより、もっぱら印刷原稿を作るといった〈版下屋（今となっては死語だが）〉の仕事が主流を占めていた。近隣の大手レコード会社からデザインの原案を受け取って、写植屋に文字原稿を渡して印画紙に打ち込んでもらい、その紙に特殊な糊を塗って台紙にペタペタ貼りつけるのだった。何度も直しが入ると、切ったり貼ったりでボロボロの痛々しい原稿ができあがった。パソコンはまだ個人が気軽に所有するような代物ではなく、ましてやパソコンでデザインするようになるなどは夢にも思っていなかった。

絵を描く時間などほとんど持てず、就職から半年後に私の気力は底をつきデザイン会社を去ることとなった。

ひと月ほどは仕事に就かずプラプラしていたが、生活費も底をつきつつあったので父の経営する印刷会社に転がり込んだ。主な仕事は母が担っていた経理を引き継ぐことだったが、専門学校に行ったりすることもなく、見よう見まねで帳簿をつけた。パソコンで表計算ソフトを使えば試算表も楽にできたのだろうが、その頃は試算表の用紙に手書きで数字を入れて卓上計算機で計算していたから、なかなか数字が合わず苦労したものだ。現在でも会社の経理を担当しているが、今ではクラウド上の専用アプリを使っている。銀行口座とも紐づけされていて、即座に経理アプリに反映される。取引先への振込も当時は一件一件、振込用紙に振込先や口座番号を書き込み、小切手を切って銀行に持ち込んでいたが、こちらも今ではインターネットバンキングへと移行して、いつでもどこでも振込手続きができるようになった。手間と時間を省くことができ、この三十五年の間に数字を取り巻く世界は凄まじい進化を遂げたものだと思ふ。

印刷会社なので時々、印刷原稿を作る仕事も回ってきた。ブラックデザイン会社での経験がここで活かされた。当初はデザイン会社の時のように文字組などは写植屋に外注に出していたが、小型のワードプロセッサの普及がそれを変えていった。書籍の本文組版は外注から内製へと移っていった。こういった流れの中で写植やフィルム製版という職種は淘汰されていった。しかし、必ずしも古いものが新しいものに取って代わられていくというわけではない。写植やオフセット印刷が主流になる前からあった、金属の活字を組んで印刷する活版印刷は、今も健在なのだから世の中というのは分からないものだ。活版印刷独特のインクの盛りが、マニアックな人たちの間で人気を博しているのだという。

そして一九八六（昭和六十一）年、日本は夢のような時代を迎えた。バブル景気だ。今では考えられない好景

気の時代……。時々、二十代の青年に「高島さん、バブルの時代ってどんなだったんですか？ オレも経験しなかったなあ～」といわれる時代が、この国にもあったのだ。

ことは一九八〇年代前半から始まる。日本は円安が要因となり輸出が絶好調で貿易黒字大国となり、一方の輸出先のアメリカは国内産業が衰退し、両国間で貿易摩擦が発生。アメリカはプラザ合意を締結することで円高を誘導していった。日本の輸出産業は倒産するところが増え、景気は一時悪化した。その事態を受け日銀は景気回復を図るため金利を引き下げる政策を行った。それによって企業は銀行から容易に融資を受けることができるようになった。景気は回復し、余ったお金が土地購入や株式投資へと流れていった。一九八六年にアメリカの象徴的建物、ニューヨークのロックフェラー・センターを三菱地所が買収したニュースは、アメリカ人の少なからぬ反感を買ったものだ。そして中小企業の我が社にも、バブル景気のおこぼれがポロポロと落ちてきたのだった。（続く）

参考文献

山下雅宏「ビジネスの考え方」 <https://yamashitamasahiro.com/archives/5683>



パンケとペンケ（七）

きれいなペンケの里を眺めてからしばらく経った。

横になってiPadを眺めていると、画面の右上のすみっこから突然ハリガネムシの神様が現れた。

「どうじゃ、イヨマンテ（クマ送りの祭り）を見に行かんか」と言う。

いいですね、行きます行きますと答えると、明日の昼に里の祭壇で待っていると言う。

祭壇は何ということはない、廃線になった胆振線（いぶりせん）の旧・蟠渓駅前の広場だ。徒歩3分。

行ってみると20人ほどの人が集まり、何やらワイワイガヤガヤやっている。大人たちは晴れ着を着て結構盛り上がっている。どうやらお酒もふるまわれるようだ。めったにないことなのでみんなウキウキしているのだ。

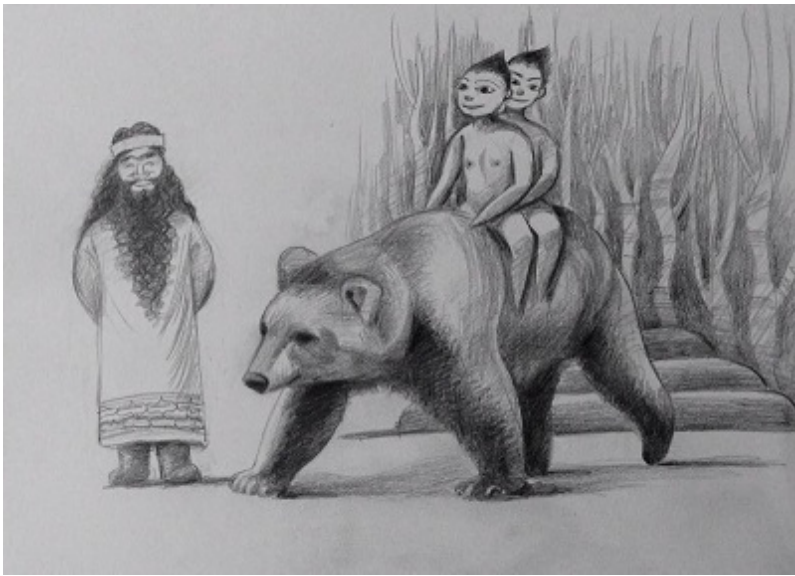
祭壇は三段式の土俵のようなもので、これから儀式が始まるぞという感じになっている。パンケちゃん、ペンケちゃんは大きなクマの背中に乗り、金太郎のように広場をグルグル回っている。ふたりはどうやら最高の気分。

オリの中には小さなクマがいて、首にひもをつけてひっぱり出し木につるし、殺して食べるという。

神様を食べちゃうんですか？・・・と言うと、ハリガネムシの神様は「これはな、なかなかデリケートな問題でな。クマの神はクマの身体の中に宿っている。我々が食べることでそのクマの魂がクマの身体を抜け出し初めて神となるのじゃ」クマの肉はクマの神からのムヤンケ（おみやげ・贈り物）なのだと言う。

でも何かやっぱりかわいそうですねと言うと「バカを言うな、生きるために自分で殺して食べる。当たり前のことじゃ。お前たちは誰かが殺したパック詰めの肉を、あれがいい、これがいいとか言って食べておろう」と叱られた。

たしかに、僕もやれ黄金豚（とん）、ルスツ豚、豊浦豚などと漁っていますからね。感謝して食べないといけませんね。そう言う「分かればよろしい」とハリガネムシの神様はニコニコして頭をなでてくれた。



パンケとペンケ（八）

昨夜、なんだか胸苦しくて目を覚ますと、何とペンケちゃんが僕のお腹の上に馬乗りになっている。

あれっ、ペンケちゃんおじさんはクマじゃないんだけどと言うと、ペンケちゃんは「クククッ」と笑う。

ペンケねえきのう9月18日に10歳になったの。明日からペンケの里に行くのよと嬉しそうに言う・・・そうか、もう10歳か。

「おめでとう。明日行っちゃうんだ。元気でね」「うん、おじさん遊びに来てね」と言う天井の隅っこに飛んで行ってスッと消えてしまった。

しばらくしてペンケの里に行ってみた。

ペンケちゃんはチセの前の庭で一生懸命地面に絵をかいている。

僕に気づくと「ペンケねえお絵かきしてるの。お花の絵が好き。きれいな小石を並べてお花の形にするのも面白いよ。パンケ兄ちゃんはお船の絵が好きなの」・・・そう言ってシカの皮に描いたパンケちゃんの船の絵を見せてくれた。

「ステキでしょ、未来のお船だって。パンケ兄ちゃんのおせんべつよ」

「この人たちは字は書かないの。何でも口伝え。歌も踊りもむかし話もみんな子どもたちには口伝えで教えるのよ。歌も踊りも絵も木彫りもすごく上手」「パンケの里では焼き物もするよ」・・・パンケ焼きとペンケ織かあ、いいね。



第一部 創造的想像力について

第一章 想像力

パスカルによると〈想像力〉は誤りの主です。同様にモンテーニュも「少しも見えないものを見たと信じている」人々のことを語りながら、その概念の核心に私たちを導き、普通一般の言語が要求するものに従ってどんな延長も私たちに見せています。何故なら、この言葉を慣例に従って理解すると、想像力とは単に、そして何よりも精神の観想的な力ではありませんし、取分け誤りと混乱が精神に入ってきますが、それは身体の動揺と同時でもあります。恐怖に見られる様に、そこでの想像力の影響は非常に有名であり、最初は拘縮、震え、発熱と悪寒、動悸、窒息といった身体そのものの疑う余地のない知覚に起因します。その時は原因になっているに違いないと思われる対象のイメージが屢々全く曖昧で、何時も消えて行きます。それらを消すのは注意力であり、それらのイメージは私たちの背後の見えない処で形作られるのであると理解して下さい。まずは厳格に点検して見分けることが大切です。有りもしない対象の外見を呼び覚ますための力は、言われる程には長持ちしませんし信じられもしません。換言すれば想像力はその本来の性質に基づいても又、私たちが騙しているのを見分けることも大切です。

もしもそれに気を付けないとするなら、強力な想像力と言われるものには曖昧なものがあります。強力なものとは、その結果によって理解しなければならず、恐怖が示す様に容易に身体の不調を招いて病気になることさえあります。しかし、その伴奏となる顔付きと身振りと動作と言葉によってイメージの濃度を判断するのは用心しなければなりません。興奮して情熱による激しい発作における巫女とも呼べる病気のような状態は、それだけで雄弁で感動的で伝染性があります。それは、熱狂的な人々が描写するものはどんなものでも、見ていると非常に早く信じない様になる一つの理由になります。先の大戦中にメッツで群衆が古い一軒家の窓の内に解放軍を見たのを信じていたと、誰かが私に語りました。彼らは、見たと信じたのです。しかし何を見たのでしょうか。太陽の反射とか恐らく虹色の色彩です。強烈な希望が群衆から群衆へ送られて話を歪めたのです。しかし希望が彼らの知覚も歪めたと言うことは、知っていること以上を言うことになります。現代の心理学は、狂人や病人を余りに信じ過ぎたものである、主要な誤りから決して立ち直ることはないでしょう。

強烈な情熱とか単に証明するための情熱が私たちを駆り立てるや否や、余り自分自身を決して信じ過ぎない方が無難であると、私は付け加えて言います。何時も恐怖の事例を思い出しましょう。そこでは目覚めるための力が不確かで模索的である時でさえも、想像力の働きが非常に強いのです。その代わりに信じることはそれ故にまさしく想像力による狂気であり、証明させたり感動を生む偽の対象ですが、証明させたり間違っただけで決定された印象を印象そのものによってその様に意味や確かさを与えたりするのも、感動であると考えすることは理性的でもあります。柱時計の時を刻む音に人の声を想像する時も、何時も柱時計の時を刻む音しか聞きませんし、注意して聞くまでもありません。しかしその場合、恐らくどんな場合でも誤った判断は、人の声そのもので救済されますし、人の声は他のものに代えられる新しい対象を生みます。ここでは想像された事物を鍛えて作り上げます。作り上げられたその事物は、そのことだけで現実となり、少しも疑うことなく知覚されます。

それらのイメージが何処からやって来るのか、これから何時かは言われ様に試みられるのですが、語られる限りそれらのイメージは存在していることになります。しかし最初に、想像力においての最も明らかな現実のものを考察するのは有益です。そして、それは一方では大変に圧制的に感受させる身体の反応を知るために色々なものを齎します。そして他方では感動に基づいて大変しっかりと支えられた偽りの判断力は、それに倣ってイメージを探究しながら期待しても屢々無駄なものでもあります。

最初の視線を確信し、それを必要な処に導くのを目指して、私たちは間違っている知覚が完全に無い、想像力に関しての或る例を示すことにしましょう。二台の重い車がお互いに接近して、そのうちの一台にあなたが乗っていて殆ど衝突しそうな目にあったことが恐らくあったと思います。その瞬間に衝撃が予期されて実際に衝突しなかったとしても、あなたの身体は血が逆流して筋肉の内部では痙攣しているのを全身で感じましたが、脅迫的部分を最も感じていたのは足に違いありません。酷い混乱であり、そこに医者がいれば、その部分に血圧の急上昇とか、運動をしていなくても筋肉の疲労の様なものを診察出来たに違いない程の非常に酷い混乱です。そして、もしもあなたがその様なことは大変に一般的なものと考えたなら、多少なりとも痛みと痕跡が一度に継続して傷害の可能性もあなたには嘘ではない様に思えるでしょう。ところが常に正確で極端でもある一般的な話し方に従うと、そこには想像力の影響もあります。あなたは熟考することも無く、自動装置となって信じたのであり、反応して仕舞ったのです。ところで、ここでは事故のイマージュは少しも形作られていません。車の進行は如何なる視覚障害もなく、正確に知覚されていました。しかし同様に良く考えることは、血や筋肉の動きはあなたの身体において未だ弱いイマージュを描いていましたが、予期された粉碎のイマージュは大変に現実味があったのです。

想像的なものの特色を示す諸要素の割合を正しく引戻すには、この例だけで十分です。身体のメカニズムがその力をそこに感じさせること、強い感動が身体の活動から切り離されずに、それと同時に本当の信念が先行して最後には対象も無く生み出されるのを感じて認識させることを私は理解します。その全体は或る意味では想像的ですが、身体の動揺によって極めて現実的で情熱的な期待という性格があります。注意力を引きつけて主に記憶の中で定着する、所謂一種のイマージュとか幻視とか幻聴となる場合の支配的な性格さえも再び見出すことが一番重要です。

この面から考えると想像力とは、本来のその性質から言うと狂気であり、狂わせるものです。先ず、身体の動揺と判断力がお互いに折り重なる様にして絶えず反応して、不安や恐怖や怒りとなって表すのは極めて明白です。そして身体の苛立ちと不規則の動きが、間違った判断を確信して仕舞った後で、私は危険であるとか、この男は私を軽蔑しているとか、この町は私に不幸を齎すだろうと思ってから、直ぐにこの判断には新しい動揺が続いて、その結果、行為が開始されたり抑制されたり反対されたりしますが、その様にして対象の欠く時がやって来るのです。そして、この動揺は情動を活気づけます。従って、もしも判断力が少しも対象を見出さなくても、少なくとも諸証明を見出します。何故なら震えも逃走も決して私の恐怖を癒やしてくれませんか、全くその逆であるからです。それ故に、身体における不規則も精神における誤りも、一方が他方を豊かにしながら、そこには想像力による現実の姿があるのであり、恐らく時間の幻視とかあるいはまさに誤って制御された知覚があり、これからはそのことを語らなければなりません。しかし先ずは情熱的で固有の描写的雄弁に対しての探究的な精神を守らなければなりませんでしたし、それらの幻視は又、物語よりももっと驚くべきものであると信じさせるに違いありません。もしも読者が慎重なこのやり方で良く見るなら、デカルトは想像力には多分対象が必要であることに気付いていて私たちに教えます。その様にして諸芸術は、常に彷徨して悲しい夢想にとっての薬として、既に現れているのです。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとう のりお

一九五〇年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた笈楨二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。笈氏亡き後の二〇〇九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、笈楨二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷 志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「蒨」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忘詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍に随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回遊」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』(第二四回横浜詩人会賞受賞)

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロボリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう) 第 6 2 号

2019年9月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/128261>

編 集 : 風狂の会 (担 当 : 高村 昌憲)

編集担当者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128261>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト